

架蔵『小源氏』考

― 梗概書と「源氏物語歌集」とのあわい ―

妹尾 好信

【キーワード】小源氏、源氏物語享受資料、源氏物語梗概書、源氏物語歌集

はじめに

中世から近世にかけて、『源氏物語』のダイジェスト版である梗概書が数多く作られた。『源氏物語』が教養として欠くことのできないものでありながら、長大かつ難解な作品であるため、なかなか全文を読破することが難しい状況の中で、容易にその全体像や要点を知ることができる手引き書が求められたのである。単に物語のあらすじを知る目的だけではなく、連歌愛好の士には、連歌に詠み込むにふさわしい付合の語に注目して記述された『源氏小鏡』の類が、また『源氏物語』を通じて和歌を学ぼうとする者には、作中の全ての和歌を載せた『源氏大鏡』や、さらに全歌を読解した『源氏物語提要』のような梗概書が提供され、大いにもてはやされた。『源氏物語』の享受層が公家から武家へ、さらに庶民へと広がっていくにつれて、梗概書の需要もまた拡大した。近世になると、『源氏小鏡』

をはじめとして刊行された梗概書も少なくないが、多くは写本として世に流布し、さまざまに書名を変え、形態を変えてバリエーション豊かになっていった。

ここに紹介するのも、近世前期に作られたとおぼしき梗概書の一つで、『小源氏』と外題する写本である。二冊本であるが、梗概書としても容量は小さく、コンパクトな書である。一見して和歌が多いことが目立ち、全歌収録型の梗概書であることがわかる。しかしながら、『源氏大鏡』の類とは明らかに異なり、むしろ『源氏物語提要』ほどの分量はない。今のところ、同じ書名であったり、同内容と思われる梗概書の存在を聞かないので、やや珍しい特異な伝本である可能性があり、ここに内容を紹介し、その特徴についていささか考察を加えることにした次第である。

一 書誌

まず、本書の書誌を記す。

写本二冊。縦二三・六cm×横一六・二cmのやや小ぶりの大本。楮紙袋綴。原装と見られる藍色無地の紙表紙の中央に、縦一四・三cm×横二・九cmの無地題簽を貼り、「小源氏 乾（坤）」と外題。見返しは本文共紙。一面八行書き。和歌は本文より一字半ほど下げて、上の句と下の句に分けて二行に記す。字高は、縦約一八cm×横約一二cm。墨付き、乾冊一二三丁、坤冊九八丁。全冊同筆で、江戸中期の書写と思われる。虫損などの痛みはなく、保存状態は良好である。

各冊巻首に、「片桐」（朱丸小印）、「博集堂」（方形墨印）、「公邨堂」（方形朱印）、「英斉」（方形朱印）、「尚應」（鼎型朱印）があり、巻尾に、「公邨堂」（方形朱印、陽刻と陰刻の二種）、「英斉」（同前）の蔵書印が捺されている。多くの人の手を渡ってきたようだ。

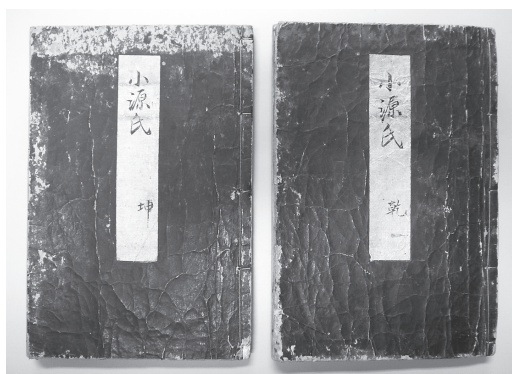
本文は漢字平仮名まじり文で、漢字には多く同筆で振り仮名が振られている。また、朱筆で読点と合点等の記号を付す。書写は極めて丁寧で、誤写と思われる箇所はほとんどなく、誤字訂正の跡もない。基本的に欄外や行間に注記などの書き入れはないが、乾冊末尾近くに二箇所異文注記が朱筆でなされている（詳しくは後述）。これは本文とは別筆で、朱の合点や読点とも色合いが異なっている。

二 全体の構成と朱の合点について

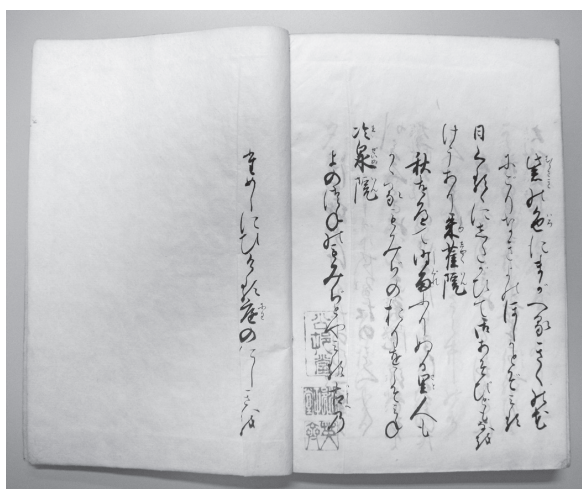
乾冊は桐壺巻から藤裏葉巻まで、坤冊は若菜上巻から夢浮橋巻までを収めており、いわゆる第一部三十三巻と第二部・第三部の二十一巻という分け方になっている。乾冊が坤冊よりも二十五丁多くて分厚くなっているのは、分量の均等よりも物語の内容上の切れ目を重視したためと思われる。内題や目録はない。

もともとが二分冊であったかどうかはわからない。各巻の終わりには基本的に一行の空白を置いて、次の巻の巻名が書かれている。一面八行のうち六行目で終わった場合は二行の空白を置き、面を改めて次の巻名が書かれている。ところが、そうならない箇所もある。乾冊では、朝顔巻が86丁表5行目で終わるが、その後3行は空白、次の86丁裏も空白で、丁を改めて次の乙女巻が始まっている。ここには大きな区切れ意識があるようだ。もとの本では、ここで冊が分かれていたのかも知れない。他に、花の宴巻も32丁表4行目で終わり、残り4行を空白にして、32丁裏から葵巻を始めている。ここにも何らかの区切れ意識があるように見える。

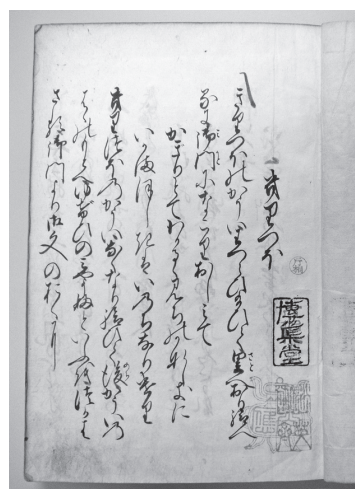
一方、坤冊では、幻巻が39丁裏5行目で終わり、3行空白を置いて、丁を改めて40丁表から匂宮巻を始めている。これは明らかに正編と続編の切れ目を意識したものと思われ、もとはここで冊が分かれていた可能性もあろう。橋姫巻は、竹河巻が48丁裏2行目で終わった後、2行の空白を置いて5行目に巻名が書かれている。宇治十帖



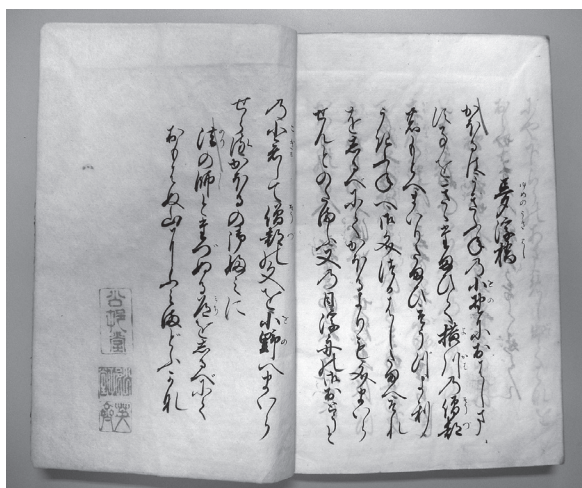
表紙（右・乾冊、左・坤冊）



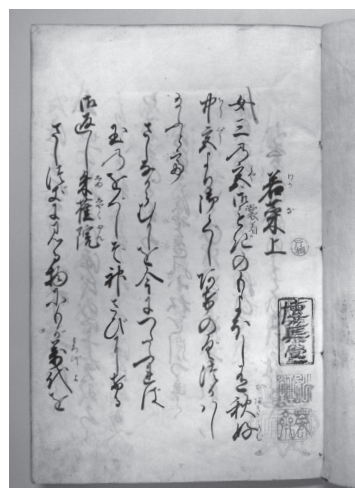
乾冊巻尾（藤末葉巻末）



乾冊巻首（桐壺巻頭）



坤冊巻尾（夢浮橋巻末）



坤冊巻首（若菜上巻頭）

の冒頭を意識した切れ目のように見えるが、総角巻は、椎本巻が58丁裏5行目で終わった後3行空白にして、丁を改めて59丁表から始まるという、やや不自然な形になっている。ことによると、ここにも本来冊の切れ目があったのか。その他、坤冊には、若菜下巻と柏木巻の間に2行の空白があり(11丁裏)、次の横笛巻の冒頭には丁の始めに2行の空白を置いて巻名が記されている(15丁表)とか、紅梅巻の冒頭が最終行から始まっている(40丁表)とか、基本的な方針からはずれる箇所が見受けられる。これらは、本書とは異なる編成や書写方針であった本を写したために起きた現象ではないかと思われる。なお、本書には、並びの巻や雲隠巻に関する言及はない。

巻名の上には、朱の△印がある。若紫・玉鬘両巻にはこの印がないが、記し忘れたのであろう。空蟬巻の終わり近く、「せみの羽も……」の和歌の詠者を示す「空蟬」の語の上に△印がある(12丁裏8行目)が、これはこの二文字を巻名と見誤ったものと考えられる。

各巻の冒頭をはじめ、所々の行頭に朱の合点が付されているが、これはおそらくまとまった記事内容の切れ目で、新たに話題が転換する箇所の頭に付されているものとおぼしい。また、和歌の頭にも所々朱の合点があるのは、巻名歌やそれに準じる和歌、またはその巻を代表する和歌に付けられているように見受けられる。

はじめの数巻の状況を見る。桐壺巻には巻名歌がなく、代表する和歌がないためか、合点のある和歌がない。帚木巻では「数ならぬふせ屋におふる名のうさに／有にもあらずきゆるは、き木」、空蟬

四

巻では「うつせみの身をかへてげる木の下に／なを人がらのなつかしきかな」、夕顔巻では「よりてこそそれかとも見めたそかれに／ほのくみつる花のゆふがほ」で、それぞれ巻名歌。若紫巻では、誤って下の句の頭に合点があるが「はつ草のおひ行すへもしらぬまに／いかでか露のきえむとすらん」と、「手につみていつしかもみん紫のねにかよひける野邊のわか草」の二首に合点が付されている。両首とも巻名歌ではないが、少女時代の紫の上を初草や若草にたとえたもので、巻名歌に準じる歌であり、若紫巻を代表する歌という認識だろう。末摘花巻では「なつかしき色ともなしになに、この／すへつむ花を袖にふれけん」が巻名歌であるが、合点はない。他に合点のある歌はないので、記し落としたのであろう。紅葉賀巻は「物思ふにたちまふべくもあらぬ身の／袖うちふりしこ、ろしりきや」、花の宴巻では「いづれぞと露のやどりをわかむまに／小ざ、がはらに風もこそふけ」に合点がある。ともに巻名歌のない巻だが、この両首は巻を代表する和歌と見したのであろう。以下は省略する。

朱の合点を付したのは『小源氏』の作者とは別人である可能性が高いが、和歌への合点の付け方は、作中の和歌をすべて載せる本書が和歌に着目して享受されていたことを示すものと思われる。

朱書きと言えば、書誌の項でも触れたように、本書には、乾冊末尾近くに二箇所、朱筆による傍書がある。ともに藤末葉巻である。一つは、「なき人のかげだにみへずつれなくて／心をやれるいさらゐの水」(121丁裏)の歌で、初句「なき人の」の「の」字の右に「は」

と朱筆で傍書がある。「なき人は」の異文があることを指摘した注である。もう一つは、その三首後の和歌「色まさるまがきのきくもおりく／袖うちかけし秋をこふらん」(122丁表)で、結句「こふらん」の「ん」の右に朱筆で「し湖月」と傍注がある。こちらは「こふらし」の異文があるという注で、それは『湖月抄』の本文であるという。確かに『湖月抄』には「こふらし」とあり、先の「なき人の…」の和歌も『湖月抄』には「なき人は」とある。双方とも『湖月抄』との校合による異文注記なのだろう。この二箇所傍注は読点や合点よりも明るい朱で、別人による書き入れと見られ、本文とも別筆である。なぜこの二箇所のみ注記があるのかは不明である。

三 和歌の脱落と歌順の相違について

本書の最大の特徴は、『源氏物語』の作中歌全七九五首をすべて載せていることである。ただし、一首だけ不足している。胡蝶巻にある「思ふとも君は知らじなわきかへり岩漏る水に色し見えねば」(三二六)が本書には見えないのである。この歌は、柏木が実の姉とも知らずに玉鬘に贈った懸想文で、この歌ゆえに柏木は「岩漏る中将」の異名を持つ。ここは和歌だけを書き落としたわけではなく、この和歌を載せる場面そのものが脱落したと考えられる。それが『小源氏』の作者のミスなのか、転写上の不手際なのかはわからない。

この他、和歌に関しては、現行の『源氏物語』本文とは歌順が異なる所が二箇所ある。一つは葵巻で、葵祭の日に源氏が紫の上の髪を削ぐ場面と、源典侍と和歌の応酬をする場面とが前後入れ替わっているために、「はかりなき」(二一〇)と「ちひろとも」(一一)の二首が、「はかなしや」(一二二)・「かざしける」(一一三)・「くやしきも」(一一四)の三首の後になっている。また賢木巻の「月のすむ雲井るをかけてしたふとも」此世のやみになをやまどはむ」(二六〇、46丁裏)と「大かたのうきにつけてはいとへども」いつか此世をそむきはつべき」(二六一、46丁表)が逆になっている。しかも本来、源氏と藤壺との贈答であるはずの二首が、「大かたの…」は藤壺が内裏(朱雀帝)の見舞いへの返事として詠んだ歌、「月のすむ…」はそのついでに源氏が帝に言伝えた歌となっている。前者は単純な場面の入れ替わりであるが、後者は現行の『源氏物語』本文とは異なる場面展開になっている、いかなる本文に基づいているのか興味深いところである。

四 物語歌集の側面

さて、本書の『源氏物語』梗概書としての第一の特徴は、先にも述べた通り、一首の脱落はあるものの、基本的にすべての作中和歌を載せているということである。梗概書には二通りあって、『源氏小鏡』のように和歌の数を百数十首程度にしぼって筋を中心に載せ

るものと、『源氏大鏡』のごとく全歌を載せることにこだわったものが存在する。筋主体の梗概書と和歌主体の梗概書の二つに分かれると言つてよい。本書は明らかに和歌主体の梗概書である。

和歌主体の梗概書の代表と言える『源氏大鏡』は普通上・中・下三冊から成るのに対して、本書は乾・坤二冊本であり、一面八行書きで和歌を二行に書く書式だから、文字数は『源氏大鏡』に比べてかなり少ない。『源氏大鏡』に比して本書は和歌の比重が相当大きいことになる。

桐壺巻の書き出し部分の記事を他の梗概書と比べてみよう。『源氏大鏡』(二類本)では、

桐壺は、大内四十八殿の其ひとつ也。しげいしやうと云も桐壺のから名とみゆ。太上天皇をも、いづれの御時にかと本にあり。

此御門に女御更衣あまたさぶらひ給ふ中に、やんごとなききにはあらぬが、すぐれて時めき給ふ有けりと云は、光源氏の御母なり。此更衣、桐壺に住給ふ。一の巻には此人の事をのみさたしたれば、桐壺と名付、太上天皇をも桐壺の御門と申也。

とあって、『源氏物語』桐壺巻の冒頭表現に即しつつ、登場人物を紹介し、巻名の由来を説くことからはじめている。『源氏大鏡』と同様に作中和歌全首を載せる梗概書である広島大学蔵『佚名源氏物語梗概書』も、

女御更衣あまたさぶらひ給ける中に、いとやむことなききはにあらぬか、すくれてときめき給ありけり。

と、物語の冒頭表現をそのまま用いた書き出しになっている。また、『源氏小鏡』でも、

きりつほといふまきのこと、大内にある御殿のなゝり。しけいしやといふはきりつほの事なり、このきりつほにひかる源氏のおんは、さふらはせたまふ。さてこそ、きりつほのかうゐとは申けれ。

と巻名の由来から光源氏の母更衣の紹介へと進んでいく。

ところが、本書『小源氏』では、

きりつほのかうい、わつらひ給ひて、里へおり給へるに、御門みかどになこりおしみて

かぎりとてわかる、みちのかなしきにいかまほしきはいの
ちなりけり(一丁表)

と、いきなり桐壺更衣が内裏退出に際して和歌を詠むところから始まるのである。巻名の由来の説明も桐壺更衣の紹介も、光源氏の誕生についての記述も、何もない。その後、「きりつほのかうい、なかなり給ひて後、かういのはゝのもとへ、ゆげひのみやうふといふを、つかはさる」(同)とあって、帝の歌、靱負命婦の歌、桐壺更衣の母の歌が記される。光源氏の名が初めて記されるのは、

源氏の君、げんぶくし給ひけるおりに、しうとの左大臣さだいじんに、御門よりよみて下されける

いときなき初はつもとゆひにながき世をちぎることゝろはむすび
こめつや(二丁裏)

と、元服時に父帝が舅となった左大臣に和歌を贈ったところである。

これより先、

御門より御文のおくに

みやきの、露ふきむすふ風のをとにこはきかもとをおもひ

こそやれ (1丁表～1丁裏)

とあって、この歌の小萩は光源氏をさすわけだが、何の説明もない。本書は、ただ和歌が詠まれた状況と詠者名をごく簡略に記すだけで、淡々と、そつげなく記述されているのである。本書の記述は、物語の筋を簡単明瞭に理解するための梗概書としてはほとんど機能していないように見え、それはあたかも歌集の詞書のような記載ではない。『源氏物語』の筋や登場人物についての基礎知識を持たない読者には本書を読んでも物語を理解することは難しいであろう。しかし、ある程度『源氏物語』のことを知っている読者には、詠歌場面を通して『源氏物語』を鑑賞する手引きにはなると思われる。

中世以降、『源氏物語』から作中の和歌のみを抜き出して配列した「源氏物語歌集」の類が作られている。古くは、花山院師賢編かという小御門神社蔵の『源氏物語歌集』若紫巻一卷が知られるが、これは「源氏物語の歌を引き、そのための詞書としての本文と作者を引く」もので、「詞書によつて場面を説明し、その後に歌が引かれる⁵⁾」という形態は、本書にかなり近いところがある。本書はそのような詞書付きの「源氏物語歌集」の影響を受けて作られたのであるかも知れない。

本書の記述が歌集の趣を備えていることの顕著な現れとして、若

紫巻に次のような記事がある。

げんじ、むらさきのうへのかたに、一夜とまりたまひて、かへりたまふ道に、としごろしのびて、かよひたまふ女の、やど有ければ、過行給ふとて、

あさばらけ霧たつ空のまよひにもゆきすぎがたきいもがか

ど哉

と、いひ入れれば、内よりつかひを出して、よみ人しらず

たちとまり霧のまがきの過うくは草のとざしにさはりしも

せじ (19丁表～20丁表)

極力和歌の直前に詠者名を記す本書の方針がすでに歌集集であるわけだが、ここでは私に傍線を付したように「たちとまり」の歌の詠者を「よみ人しらず」と記している。先に「としごろしのびて、かよひたまふ女」とあるので詠者名は不要なわけだが、あえて「よみ人しらず」と、まさに歌集の作者名表記をまねた記述をしているところが、いかにも本書が歌集を意識していることを表している。ただし、このような表記はここ一箇所のみである。

五 場面の詳細な描写箇所

さて、本書の記述が「源氏物語歌集」の類を意識していることを指摘したが、実は、本書は終始淡々と詠歌状況の簡潔な説明と詠者名の記述ばかりをしているわけではない。時として、なかなか詳細

な場面の描写が見られることもあるのである。

一例を挙げる。若紫巻の冒頭に次のような記事がある。

げんじおこりをわづらひ給ひて、北山に、ひじりの住けるかたへ、おはしけり、御ふうを奉り、かぢしけり、おこりの心まぎらはし給はんとて、立出てこゝかしこ見たし給へは、僧坊おほき中に、こしばがきのうちに、女わらははべ、わかき人などみゆるを、惟光ばかり御ともにて、のぞき給へば、西おもてに、持仏堂あり、四十あまりのあま君、きやうよみゐたり、きよげなるおとな二人、わらははべ出入遊ぶ中に、十ばかりにやあらんと見えて、白ききぬ着て、はしり来るむすめ、あまた見へつるわらわへに、似るへくもなく、うつくしきかたちなり、これなんむらさきのうへにておはしけり、(13丁表〜14丁表)

ここには北山での若紫垣間見場面がかなり詳細に記述されている。これは、たとえば『源氏小鏡』(前掲第一類本)に、

源氏十七のとし、わらはやみをして、きたやまにたつきひしりありとて、めしけれとも、京へはいてぬ事とてまいらす。さらはとて、きた山へおはします。かのひしり、かちしたてまつりたれば、おこらせたまはす。なをのこりおそろしとて、その日と、まりて、御かちなとにまいりたまふ。つれ／＼なれば、たちいて、こゝかしこのそきて御らんすれば、女のすめるところあり。なに事にかはとおほして、のそきたまへは、かのひめきみのうはは、このおこりおとしたる、ひしりの御てし、そ

うつの御あねなり。此うはきみ、こゝちなやみたまふほとに、いのりなむとせんとて、この山におはしましに、ひめきみをもつれておはしましたるを、のそきて御らんしはしめさせたまふ。

とある記事と分量的に遜色ない。それどころか、『源氏小鏡』が若紫の祖母尼君の素姓に関心を示した書き方をしているのに対し、『小源氏』の方が若紫の可憐な様子に注目していて印象鮮明である。引用末尾の「これなんむらさきのうへにておはしけり」という一文も、本書には珍しい登場人物紹介の言葉だが、そこには物語のヒロイン紫の上に対する作者の思い入れが窺える。

この記事にあたかも対応するかのように詳細に描かれているのが、御法巻における紫の上臨終場面である。

紫の上、心ちいと苦しくなり侍りぬとて、御木丁引よせて、ふしたまへるさまの、常よりもたのもしげなく見え給へば、御祈りの使ども、数もしらず立さはぎ、夜一夜、さま／＼の事、せさせたまへど、甲斐なく、明はつるほどに、きえ果給ひぬ、殿のうち、さらに物おぼえたるはなし、げんじは、ましておほししづめんかたなし、夕霧の大将、参りたまひて、よろづとりおこなひ給ふ、空しき御からにても、今一たび見奉らんとて、御木丁引あげて見たまふ、過しころ、野分のあした、見奉り給ひしことなど、おほし出て、夕霧

いにしへの秋のゆふべの恋しきに今は見えしあけぐれの

夢 (30丁裏～31丁裏)

紫の上の臨終のさまと源氏の放心、亡骸に直面する夕霧の心中などが、簡潔ながら迫真的に描かれている。『源氏小鏡』(同前)には、かくて日をへて^(つ、か) おもひて、八月中はの程に、かくれさせ給ふ。いんの御心のうち、おもひやるべし。もやにいり給へとも、かきりのさまは、しるかりければ、御くしおろさむとて、そのさほうするに、ふりわけかみのむかしより、てなれ給ひて、いまはと、そきおろしけん、あけくれの心まよひ、ゆめうつ、わきまへたまはず。日ころ、なれつかうまつりし人々、さらにもひわくかたもなく、ものおぼえたる物、一にんもなし。なか／＼ゐんそ、心つよくもてなし給ひて、大しやうのきみに、のたまひあはせて、ことゝも、おこなはせたまふ。この大しやう、むかし、のわきのあさかとよ、かせのまきれに、のそきて見たてまつりし御あさかは、いかならむよにも、おほけなくおもふまては、なかりしかとも、わすれかたく、おもひたてまつりしかは、いまならて^(こゝろ) おほして、なに心なく、うちふし給へる御かほを、つく／＼と、まほりたてまつりたまふに、いと、ひかりさしそふ心ちして、むなしき御からを、わかたましゐるの、しみいる心ちせしそ、わりなかりし。

とあつて、本書よりも詳細に記述されているが、「なか／＼ゐんそ、心つよくもてなし給ひて、大しやうのきみに、のたまひあはせて、ことゝも、おこなはせたまふ」云々にはやや脚色があり、本書の「げ

んじは、ましておほししづめんかたなし、夕霧の大将、参りたまひて、よろづとりおこなひ給ふ」の方が『源氏物語』本文に近いようだ。

紫の上に関わる場面と言えは、葵巻の髪削ぎの場面も、本書では、むらさきのうへの御ぐし、つねよりもきよらに見ゆるを、かきなでたまひて、けふはよき日なり、御ぐしそぎたまへとて、みづからたちよりて、いかにおひやらんとすらんと、そぎわづらひたまふ、海松^{みづる}など、かみにはさみて、千尋^{(6)ちひろ}といはひきこへたまふ、げんじ

はかりなきちひろのそのみるぶさのおひゆくすゑはわれのみぞみん

むらさきのうへ

ちひろともいかでかしらんさだなくみちひるしほののだ

けからぬに (34丁表～34丁裏)

とあつて、会話をを用いなどしてやや詳しく書かれている。このように、作者はかなり紫の上に思い入れの深い人物であつたらしい。

ただし、明石巻に、

明石^{あかし}の上へ、かよひ給ふ事、紫^{むらさき}の上聞^{うへきこ}たまひて、うらみたまへる御文あり、源氏のかたより、かさねて

しほ／＼とまづぞなかる、かりそめのみるめはあまのすさみなれども (63丁表)

とあるのは誤解で、源氏は、風の便りに紫の上の耳に入ることを恐

れて自ら明石の君とのことを告白したのである。紫の上蟲肩ゆえの
思い違いであろうか。

他に、本書で目立った詳しい描写としては、胡蝶巻冒頭の、

やよひ、はつかあまりのころほひ、紫の上の御まへのありさま、
つねよりことに、花の色、鳥の声、めづらしう、見へきこゆ、
ほかは、さかり過たる桜も、今さかりに、ほゝゑみ、らうをめ
ぐる、藤の色も、こまやかに、池の水に、かげをうつしたる、
やまぶき、峯よりこぼれて、いみじき盛なり、龍頭鎧首の舟つ
くらせ、池にうかへさせ給ふ、女房たちは、中嶋の入江に舟さ
しよせて見給ふ(96丁裏〜97丁表)

とある『源氏物語』本文を巧みに写した六条院の春の御殿の庭の描
写や、真木柱巻の、

ひげ黒の大将の、もとのきたのかた、父のかたへ、かへり給ふ
とて、出たち給へは、姫君もおなじく出たまふとて、つねによ
りゐたまふ、ひんがしおもてのはしらを、人にゆづる心地した
まふもあはれにて、姫君ひはだ色の紙に哥を書いて、はしらのひ
われたるはざまに、かうがいのさきにて、をしいれたまふ

今はとてやどかれぬともなれきつるまきのはしらは我をわ
するな(111丁裏〜112丁表)

という、真木柱の姫君が家を出る場面の記事などが挙げられよう。
このように、『小源氏』は、基本的には物語歌集に近い和歌中心
の簡略な記述を旨としつつも、所々に『源氏物語』の本文を要領よ

くまとめたやや詳細な記述もする、梗概書と物語歌集とのあわいに
ある個性的なダイジェスト版であると言ふことができるのである。

六 作中人物の呼称等について

本書では、作中人物の呼称は、概ね『源氏物語』の登場人物とし
て穏当な呼称が用いられていると言つてよい。光源氏は、身分・立
場は変わっても最後まで「源氏」、紫の上は若紫巻からずっと「紫
の上」である。呼称が変わるのは、正編では、「斎宮」から「秋好
中宮」に変わる六条御息所の娘くらいであろうか。女三の宮は出家
後も「女三の宮」ないし「女三」、その姉は「女二の宮」ないし「女
二」で、一般的な「落葉の宮」の呼称は用いられない。

続編の宇治十帖では、登場人物の呼称が通常とは異なることが多
い。「薰」「匂宮」「八の宮」などは終始その呼称で変わることとは
ない。特徴的なのは、八の宮の娘たちである。普通、八の宮の三人の
娘は、「大君」「中の君」「浮舟」と呼ばれる。ところが、本書では、
「大君」「中の君」と呼ばれることはない。大君は「姉君」、中の君
は「妹の君」ないし「姫君」と呼ばれる。そして浮舟は、最初に登
場する寄生巻から次の東屋巻までは「東屋の君」と呼ばれ、浮舟巻
から「浮舟」の呼称に変わる。「手習の君」という呼称は古系図な
どに見えるが、「東屋の君」は他に知らない。何か典拠とした文献
があつたのなら興味深いところである。

人物の呼称とは別に、宇治十帖には、もうひとつ珍しい固有名詞が出てくる。宇治の平等院である。椎本巻の冒頭に、

きさらぎ廿日のほど、匂宮初瀬にまふでたまふ、御かへりに、
平等院に立寄給ふ、(53丁表)

とあり、手習巻の冒頭にも、

浮舟は、平等院のうしろの木の下に、いきもたえぐにて、ふ
しておはしけるを、横川の僧都、車にのせて、小野といふ所へ、
いざなひ、かぢなどし給ひて、やうくいき出たまふ、(89丁
裏〜90丁表)

とある。平等院は道長の別荘宇治殿を継承した頼通が永承七年(一〇五二)に寺として創建したものであるから、もちろん『源氏物語』にその名は見えない。『源氏物語』本文では、椎本巻には「六条院より伝はりて、右大殿しりたまふ所」とあって、光源氏から受け継いで夕霧が領有している所と言い、手習巻には「故朱雀院の御領にて宇治院といひし所」とあって、両者は別の建物であるはずだが、本書ではどちらも「平等院」とする。明らかに錯誤ではあるが、おそらくこれは『源氏物語』研究史における准拠論と関係があるう。

『花鳥余情』には、椎本巻の記事に関して、この邸はもと河原左大臣源融の別業で、後に六条左大臣源雅信の所領となったのを道長が買い取って別荘にしたもので、それを「宇治関白の代になりて永承七年に寺になされて法華三昧を修せられ平等院となつて侍り」と言い、「六条左大臣より御堂関白につたはりたるを六条院よりつたは

りてとはかきなし侍るなり」とある。また、手習巻の記事に関しては、『河海抄』に、「平等院建立以前有宇治院号歟可引勘」とあり、『花鳥余情』は天暦元年(九四七)に陽成天皇が宇治院で遊獵したという『吏部王記』の記事と、天慶八年(九四五)に朱雀院(宇多法皇)が宇治院萱原庄の後院に逗留したことを記す文書を引用して、「今案朱雀院は寛平法皇を申也それを此物かたりの朱雀院にかきなせるなり」と書いている。これらの考証により、椎本巻の別荘も手習巻の故朱雀院の御領である宇治院も同一であるとして、ともに平等院のことだという理解が生じたのであろう。『小源氏』は『源氏物語』の成立年代を無視したか、「今の平等院」のつもりで「平等院」と記したかのどちらかであろう。なお、『源氏大鏡』(前掲第一類本)には、手習巻に「宇治院といふ所に中宿したり」とある箇所に「平等院なり」と割注がある。本書の記述に影響を与えているかも知れない。

おわりに

以上に述べたごとく、本書『小源氏』は、梗概書ではありながら、基本的に詠歌場面に限定して取り上げ、和歌の詠作状況の簡潔な説明と詠作者の明示を重視しており、かなり「源氏物語歌集」に近い趣を有している。そういう意味で、梗概書と「源氏物語歌集」とのあいにある作品と言える。ただし、登場人物の紹介はほとんどな

く、重要な事件についてさえ取り立てて言及しないこともあるので、『源氏物語』についての基本的な知識がない読者には理解しがたい面があることは否めない。それでいて、妙に詳しい場面描写を行うこともあり、そこには作者の興味や嗜好が窺われる、かなり特異な個性を持つ梗概書であると言えそうである。伝来や享受の実態を知るためにも、類似伝本の発見が望まれるところである。

〔注〕

- (1) 本稿における『源氏物語』本文の引用は、「新編日本古典文学全集」『源氏物語①～⑥』（小学館）による。和歌の後の3桁の番号は『新編国歌大観』の歌番号である。
- (2) 引用は、「古典文庫」508、石田穰二・茅場康雄編『源氏大鏡（訂正版）』（平成元年 古典文庫）による。句読点を一部改変した。以下、同じ。
- (3) 引用は、「平安文学資料稿」第三期別巻一、稲賀敬二・妹尾好信校『佚名 源氏物語梗概書（広島大学蔵）上』（平成11年 広島平安文学研究会）による。
- (4) 引用は、岩坪健編『源氏小鏡』諸本集成（平成17年 和泉書院）に翻刻された第一類・京都大学本（伝持明院基春筆）による。以下、同じ。
- (5) 伊井春樹編『源氏物語 注釈書・享受史事典』（平成13年 東京堂出版）。
- (6) 「海松^{みる}など、かみにはさみて」という描写は『源氏物語』本文にはない。『河海抄』に、「かみそきの具足に海松を用也」とある古注の理解に影響を受けた表現かも知れない。
- (7) 引用は、伊井春樹編『源氏物語古注集成』1『松本 花鳥余情』（昭和53年 桜楓社）による。以下、同じ。
- (8) 引用は、玉上琢彌編、山本利達・石田穰二校『紫明抄 河海抄』（昭和43年 角川書店）による。注（6）の引用も同じ。

A Study on “Ko-geiji”: Between the Summary of “The Tale of Genji” and the Collection of Poems

Yoshinobu SENO

In this paper, I will introduce a manuscript titled “Ko-geiji.” It is a summary statement on “The Tale of Genji” thought to have been written in the early Edo period. It comprises two volumes, but the summary statement portion is small and brief. At first glance, it includes a conspicuously large number of Japanese poems, and we find the summary statement to have been edited with a plan to comprehensively cover Japanese poetry.

Although this book is a summary statement, it basically focuses only on scenes in which Japanese poems have been composed, and on briefly explaining the circumstances in which the poems have been composed as well as identifying the authors. In that sense, it can be said that it is a work in between a summary statement and poetry collection. As few characters are introduced, and there are cases where important events are not mentioned, readers who do not have basic knowledge of “The Tale of Genji” might be lost. On the other hand, it sometimes describes scenes in detail; however, this depends on the interest and preferences of the author. Thus, the book can be construed as a uniquely personalized summary statement.

